うろこアンソロジー　二〇一四年版

うろこアンソロジー 二〇一四年版 目次

晩秋 ―枯れ葉たち― 冨澤守治 3
海の故郷 南原充士 5
疾走するモーツァルト 有働 薫 6
旅について 清水鱗造 8
母 岡田すみれこ 10
てててっぽっぽう 高田昭子 13

晩秋 ―枯れ葉たち―

冨澤守治

「とき」はいやでも過ぎて行く
秋の嘆きは、どこまでも深く

枯れ葉の負う責めは、どの秋にも不当である
自ら、灼け付き、燃え尽きて行く

この悲しみは、怒りをともなうものか？
「不当なり」とも声をあげるものか？

さかしらに枯れる行為を疑い、告発するものの
不正義は、いつの世も安全なところに身を置き

罪なきものは、枯れ葉にして
押し黙り、大樹より振り解(ほど)かれる

それであるならば、天こそ罪を負え！

秋の空は、空は、晴れてはならないのだ
風もまた、一枚の枯れ葉を護るためならば
吹いてはならないのだ

海の故郷

南原充士

路地裏に響く物売りの声のように
浅い眠りを揺り動かそうとするもの
ようやく一行の日記にと書きとどめおく日々
くりかえし見る夢が人の記憶を不確かにする
今では思い出さえ贋の履歴書のようだ
ほんとうに少しでも家具のようなものがなかったなら
人は自分をつなぎとめておくことができなかっただろう
わたしは時たまにほんの一瞬目を閉じてみる
ふと波立つ海の故郷が見えてくるように錯覚したいためにのみ

疾走するモーツァルト

有働 薫

ところで最近ぼくはこの世の通貨に欠乏しています
預金という社会インフラがまだ整備されていないし
ぼくは5歳の頃から働いてきましたが
貴族の前でピアノを弾いて報酬を得る芸術的労働も
現金でなくて大抵はいらなくなった懐中時計とか古めかしいデザインのブローチとか
ザルツブルグの家にはざらざら残してあるよ
やむおえずフリーランスの嚆矢となってからは
大衆やまだ小規模なブルジョアからも注文が入りますから
仕事がなくてぶらぶらするなんてラッキーなことはまずないんです
いつも超忙しくしていますよ
借金魔だとか金銭感覚ゼロとか衣食住あげて贅沢三昧と謗られているのは知っています

よ死の1カ月ほど前猛烈な食欲に襲われて、当時手に入れにくかった高級な肉を思う存分食べた夜があった、美味かったな、あれがやすらぎの国への長旅の弁当だったんだな
ぼくはほとんど一生涯両親にはよい息子だったし
妻も熱愛していました
ぼくは人をいじめたことなんかないよ、忙しすぎてそんなひまぜんぜんなかった
あっちへ着いたらあの温泉好きだった唐の太宗皇帝に拝謁するのが楽しみ
飛炎雪晨　人世有終　芳流無竭…
玉詩をアリアにして御前演奏するのさ　滞在費ぐらい稼げるだろう

旅について

清水鱗造

台所の小さめな窓
錆びた自転車が
裏庭の垣根に立てかけてある
窓の向こうで裸電球がぶらぶらする
そんな風情も
表道に出れば
彩りのある商品の土産物店が並ぶ砂浜沿い

遠くで新しい島が急速に拡大しているが
最初の種子は風に乗って着いたらしい
種の旅のことを思いめぐらすと

サーカスの演し物が
赤白縞模様に彩られて
延々と続く絵柄
それが種子の気持ちなんだと思う

肩に降りてきてとまった海鳥に
旅について質問すると
しきりにじゃれつくだけで
ふざけた星形メガネをかけて行ってしまった

母

岡田すみれこ

いつの間にかそんな遠くへ
独りで漕ぎ出してしまったのか
そこは遠いからいかないでねと
娘だった私が母親になって言っていた
あそこは不安だからぜったいそばにいてねと
母親だったあなたが娘のように私に訴えていた
ほんとうに心細そうに

あれほどに強かったあなたの面差しは
すでになく
不仲だったはずの娘にすべてを頼る

ひたすらに大人しい老人になっていた

五十年ぶりに手をつないだ
あなたのすべてを支えることに
途方もない重みと疲労を感じた

曖昧模糊の果てしない池に霧がたちこめるとき
あなたは大きな声で私の名前を叫ぶ
その迫力にわたしは気圧される
不機嫌に責めたてられていた頃を思い出す

けれどつかの間　池のふちで優しくできたことを
忘れてはいない
まだ会話ができていたころ
あなたがメモ帳にいつも
いろんなことを一生懸命書いていたころ

車椅子で散歩をして
花や猫を見つけていたころ

いつの間にかあなたが手を離して
どんどんと池の中へいってしまった
大声であなたがわたしを呼んでいる
ここにいるよと
わたしは答えるのだけれど
とても届かない
届かない哀しさに打ちひしがれて
今日も池に背を向けて還ってくる

てててっぽっぽう

高田昭子

遅い朝食のテーブルにいると
いつも聴こえてくる鳴き声
あれはかの詩人の「てててっぽっぽう」の声だ
いや、それは声ではなく
声が聴こえる方角だったかもしれない
明け方に哀しい涙だけを運んでくるひとの……

あの日
父は無花果を食べていた
庭の無花果の木では
てててっぽっぽうの声がする

その時初めて
ててっぽっぽうと聴こえた
かの詩人と初めて繋がった思いを
父に告げた

父は「そうか」と言って
黙って無花果を食べていた
しばらくしてから
「古里では、ででっぽうと言っていたな。」と言った
濁音と清音が息づく様々な古里の言葉
南から北へとのぼりながら
言葉は素朴な濁音をまとってゆくようだった
あの日から
父は北の古里ばかりを恋うていた

ててっぽっぽう

ででっぽう
父はすでにいない
明け方にみる父の夢と
遅い朝食はいつでも淋しい

＊ 永瀬清子・明け方にくる人よ